

【用語】雷電宮―邑楽郡板倉町の雷電神社 大々―太々神楽、神社参詣にあたって奉納する神楽 年来―数年以来、ながねん 講―神仏をまつり、または参詣するために組織する団体 別当所―雷電神社を管理する寺院、ここでは龍蔵寺 肝煎―世話をする人 得心―納得すること 振合―具合、都合 懈怠―怠けおこたること、怠慢 印形―印、印判

【解説】板倉の雷電神社は、火雷大神などの雷神をまつり、関東一円に分布する雷電神社の総社的な存在であった。棟札によれば天文十六年（一五四七）に社殿の造営があり、その後は長尾景長、徳川秀忠・綱吉・吉宗らが改修を加えた。農作物の生育や収穫などに御利益があることから江戸時代以降、農民層の厚い信仰をうけ、人々は麦の収穫前の電ひょう乱除け、早魃時の雨乞い、水田への落雷除けなどを祈願するため講を組織して参詣した。そして、参詣にあたっては講中が神楽を奉納した。

この文書によれば、雷電神社では講中の神楽奉納が天明九年（二七八九）から行われ、それが盛んになってきたことがうかがえる。神楽を奉納する講中の増加により、従来の世話人では賄いができなくなつたため、文化九年（二八二二）世話人は別当所の龍蔵寺へ講中の賄い方を依頼したのである。その結果、この年は龍蔵寺が引き受けることになり、賄い方法の具体的内容を取り決めた。また、一年間様子をみることにし、続けることが困難な場合には寺側と世話人方で再び相談すること、継続できそうな場合は、来年から三年間依頼することなども取り決めていた。